

「阿蘇菜の花プロジェクト」から「緑と太陽の島九州」へ

【菜の花を植えて、阿蘇観光を、農業と共に活性化しよう】

【空き地をすべて緑化し、エネルギーを太陽にいただこう】

はじめに

1世紀後の九州は、人口が半分になって土地には余裕ができ、下手をすると荒れ地のまま放棄された空き地が広がりかねない。今も、地方都市では、街の中心の建物が空き地へ、空き地が駐車場と化している。舗装面の降雨は地下に浸みず、一気に流下する。都市の賑わいも風格も失っている。他方、遠い将来においても、地球規模の水不足、食糧やエネルギー資源は逼迫状態が続き、自給率向上が強く求められていることだろう。

そこで、両者への超長期的な対応を念頭において、空き地を街の美観形成の要素として位置づけ、春は菜の花、秋はコスモスを植えて街に潤いを与えよう。菜の花からは蜂蜜を採集し、菜種から油を採り、天ぷらの廃液は自動車の燃料としよう。

その先駆的アイデアとパイロット的な取組を阿蘇で進めてみたい。まずはそれを成功させ、太陽エネルギーを植物から採取することによるエネルギーの自給率を向上させる、九州全域のプロジェクトへと発展させたい。

・阿蘇パイロット事業

阿蘇五岳を中心に、外輪山から見た阿蘇谷の風景は素晴らしい。その阿蘇谷は、寒冷地のため夏場だけの一毛作である。その田畑に、春一面、菜の花（を中心とする花）を咲かせる。田畑の広さが違うので、色違いの花を植え、絵を描けば、毎年違った風景が見られ、造る側も見る側も楽しめ、新しい阿蘇観光熊本が出来上がることだろう。桜の開花時期から5月連休すぎまで菜の花を咲かせ、観光スポットをつくり、観光産業を振興させたい。広さは、5,500ヘクタール程度を考えている。

菜種油は、天ぷらに使用済みの廃油でもディーゼルオイルの代わりとして利用できる。菜種油を取るのには、との関係で、休耕田の菜の花だけを対象としたい。岩手県にある東北農業研究センターでは、従来の菜種がもっていた毒素を排除した品種（ななしぶき）を生み出した。技術的にもそれを活用したい。

課題は、農家の協力と農学技術の面があり、農学技術に関しては、米と菜の花の植え付け、収穫のタイミングが通年的にうまくサイクルできるか、研究を重ねたい（菜の花は9月から10月初旬に植えないと成長が悪い）

農家の協力を阻害する要因としては、実入りが無いのになぜやらねばならないか、である。阿蘇地域の米による収入は50億円だが、あと、20億円～30億円が農家に渡るようする必要がある。現在、1反10万円。1反当たり3万円が追加的な実入りとなれば協力が得られるが、これを観光や養蜂でかせげるか...

- 素通りの阿蘇観光

年間 500 万人から 600 万人の阿蘇入り込み客数があるが、ほとんどが火口をみる 30 分の立ち寄りだ。それを 2 時間程滞留させたい。黄色い菜の花絨毯をみるための駐車場整備も収入源となる。

菜の花を起爆剤として、たとえば、菜の花蜂蜜、菜の花漬物等の商品化。民宿、料理 etc. それらが合算されて農家収入を増大させていくことだろう。

- その他

地元自治体の協力が不可欠だが、熊本県阿蘇振興局や阿蘇市、長陽村の村長など大いに関心をいただいている。また、技術的解決と課題として、

阿蘇は寒いので、開花、田植えなど、植栽サイクルを慎重に選ぶ必要がある。

菜の花の種蒔きと稲刈りの時期が重なりそうで、刈り取り機械の使い方に工夫がいりそう。

効果は、

遊覧馬車などで菜の花畑の中をゆっくり散歩する。

レストランやホテルなど菜の花の料理など出してもらいたい。

観光客の熊本に居る時間が長くなれば、観光収入が増す。

観光を取り入れた農業で、生活が安定するので阿蘇の農業の未来は明るい。

- 熊本県土へ波及させよう！

一心業の大桜との花回廊もできる。この阿蘇の菜の花観光が上手くいけば、次は天草だ。天草は 8 月には稲刈りが終わる。終わった田んぼに、コスモスを植える。春は阿蘇の菜の花、秋は天草のコスモスで、花の観光熊本が出来上がる。



「阿蘇の菜の花」想像図



左図「一心業の大桜と菜の花」。その妖艶な春の大地はいやしる地、癒しの地そのもの。

右図【名刺交換の折など、機会あるごとに賛同をいただくよう務めている。

・ 緑と太陽の島九州

阿蘇菜の花プロジェクトのうち、“新エネルギー開発”の視点を発展させて、同様の運動を、地球環境、特に温暖化対策、石化エネルギー代替資源開発を目玉として、広く九州一円で取り組みたい。そこで、日本列島でも温暖な地域としての九州という点に着目して、“緑と太陽の島九州”という夢を描いてみたい。

安全で住みよい九州の創生。そのひとつ、太陽エネルギー活用政策。

降り注ぐ陽光の恵みを最大に活用した九州づくりをしよう！江戸時代の日本は植物国家と言われる。化石燃料が見いだされていない国土においては、すべてのエネルギーのもとには太陽であった。去年の太陽が、ハゼを实らせ、ハゼの実が今年の明かりとなった。薪炭、蠟燭、建築材料、すべてが太陽の恵みを、全部一部を問わず応用したものであった。稲の藁は、全く捨てる場所がない活用がなされた。循環と再生が日本文明の原理でなければならない。幸運なことに日本は鎖国時代に経験済みである。その知識をフル活用することにより、九州におけるエネルギー自給率を飛躍的に高めよう。今からやれば間に合う。

かつての資源循環的な仕組みを、特に太陽エネルギー活用の点で捉えて、産業、生活に深く取り入れてみよう。

50年、100年後の九州を想像していただきたい！九州アイランドはエメラルド色に輝いて太平洋に浮かんでいる。陽光を最大限に活かすべく多様な植物を植えたために花と緑に覆われている。徹底した植物活用を図るなかで、鳥や動物も生息数が増え、それが観光資源となって伝統的な観光と一体化した九州の魅力は飛躍的に向上している。石化エネルギーの逼迫もあって、九州アイランドの植物活用政策の見学者や観光客は国内外から引きもきらない。

・ 交流体によるプロジェクト推進

上述のような構想を練り上げ、賛同を得て進めるには、まずは、技術的なフィージビリティの確認が必要である。しかも農学、化学、機械、電気、建設など学際的な取り組みが要求される。

1) 交流体形成の呼びかけ

複合的なプロジェクトであるので、この指止まれ！ 関心あるすべてのの方々による交流体をつくり、多方面に亘る研究や実践を進めたい。

2) プロジェクト例示

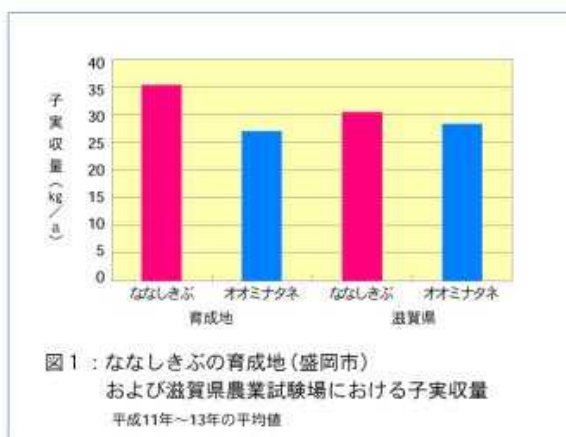
これをきっかけとして、観光開発、都市農村交流と過疎地の振興、エネルギー開発等産業振興、安全・美しい生活基盤形成など、多様なプロジェクトが発生することだろう。今や過疎地は、生命の大地として蘇っている。かくて、地域が互いに刺激し競争しあって「魅力アップ 九州」は大きく前進することだろう。

● 参考

温暖地における栽培に適した無エルシン酸のナタネ新品種「ななしきぶ」

東北農業研究センターだより (no.8) 2003.3 **《栽培予定県と菜の花プロジェクト》**

「ななしきぶ」は滋賀県で推奨品種として採用される予定です。滋賀県は貴重な水資源である琵琶湖や豊かな自然を健全な姿で次の世代へ引き継いでいくため、環境に優しい農林水産業を構築することを目指しています。この施策の一環として、平成11年度より「湖国菜の花エコ・プロジェクト」を展開し、今後は、ナタネ栽培を積極的に推進していくことが予定されています。このプロジェクトは、菜の花を植え、ナタネを収穫して搾油し、ナタネ油は料理や学校給食に使い、廃食油を回収し、石けんや軽油代替燃料(バイオディーゼル)にリサイクルして利用し、さらに、搾油時に出た油かすは肥料として利用しようとするものです。すなわち、ナタネを栽培することによって、地域にある資源をエネルギーに変えて利用し、その資源やエネルギーを地域内で再利用する、資源循環型の地域づくりをめざしたプロジェクトです。滋賀県で生まれた“菜の花プロジェクト”は現在全国に広がりつつありますが、その中で「ななしきぶ」は西日本におい



て重要な役割を担うことが期待されます。